

私の八月十五日

北九州市小倉南区 谷守 トヨ子

昭和18年3月黒崎幼稚園を卒園。4月黒崎国民学校に入学。桜の花が満開でした。

学用品もひと通り揃えて貰いましたが、質が悪く肩にかけるランドセルのベルトは一月目で切れてしまいました。母が丈夫な布の紐に代えてくれました。

筆入れはセルロイドが多く、下に落とすとパーンと二つに割れやすい。割れるとききれいな糸や毛糸で両方をつなぎ合わせていました。私の筆入れは紫色の厚紙で作ったような筆入れと、伯父からいただいた黄色のセルロイドの物と二つ持っていました。二つ持っていたので落とす事もなく長い間大切に使っていました。友達が赤い毛糸でかけじるしにつなぎ合わせた筆入れがとてもおしゃれに見えました。その頃からだんだん物がなくなって不自由になっていたのです。

鉛筆、ノートも大事に使っていました。お習字の時間は新聞紙でまっ黒になるまで稽古をして、先生に出す清書の時だけ半紙に書きました。1年生の時からお習字の時間がありました。紙もだんだんなくなっていたのです。

児童数も多かったのでしょうか。1、2年生は2部授業で午前中と午後の授業でした。私は1年6組でしたが10組まであったように記憶しています。今考えると八幡製鉄所があったので人口が多かったのだと思います。

朝登校する時は、近くの一ヶ所に集まり並んで学校に行くのです。5、6年生の上級生が班長さん。皆で合唱して歩きました。

「赤い血しおの予科練の一、七つボタンの桜が光る。今日もとぶとぶ霞ガ浦にゃー」または「ここはお国の何百里、離れて遠き満州の……」勇ましい歌を歌って学校に行っていました。雪の積もった日は学校までおんぶしてくれてやさしい上級生達でした。

当時は靴もなく下駄か黒いズック。長靴が無いので雪の上は歩きにくいのです。ズックも先生が何足かずつ順番に割当ててくれました。数が少ないので皆あちこちやぶれたズックをはいていました。ゴムの匂いのする真新しいズック靴を貰った時は本当に嬉しかったのです。ハダシで学校に来ている友達もいました。冬は足袋をはいていました。

2年生になるとお弁当を持っていく日がありました。昼食の時間は楽しみでした。食べる前に先生とクラス全員で合唱するのです。

「はしとらばー、雨土みよのおんめぐみ…… の恩を味わえー」。「……………」は文句を忘れたのです。「お百姓の皆さんありがとうございます」「お父さんお母さんありがとうございます」と皆でいっていただきました。いつもは防空頭巾をかぶり、母の着物で仕立てたもんぺをはいて学校に行っていました。

空襲警報のサイレンが鳴ると授業はすぐに中止、ランドセルを背負うと一目散に家に飛んで

帰りました。先生からあぶない時は両手で目と耳を押さえて地面の上につ伏せになりなさいといわれていました。教室では机の下にもぐり込む練習もしました。

八幡の空は度々空襲があるようになりました。家の横に父が大きな防空壕を作っていました。サイレンが鳴ると父はすぐに職場である黒崎駅へ飛んでいきました。私は大豆の炒った袋を持って母と妹と一緒に防空壕へ飛び込むのです。隣のおばあちゃんと娘さんも入ってきました。雨が降ると水がたまるので母がよくひしゃくで中の水をかき出していました。

そのうち戦争もいよいよ烈しくなり、店はお菓子屋さん、パン屋さん、洋服屋さん、大きな店は戸を閉めてしまいました。何もかも品不足で売れる物がなくなったのでしょうか。全ての物は配給制で隣組で分けて貰いました。

クラスの友達も一人、二人と疎開していきました。仲良しの下村れい子ちゃんも引っ越しして行きました。20年3月、敗戦の色濃くなった春休み、とうとう私の家も母の郷里である田川郡添田町に疎開する事になりました。

母と3才の妹、生まれたばかりの妹と一緒に祖母の家に引っ越ししました。黒崎駅に勤める父が一人残りました。祖母の家は旧家の高瀬家なので家も庭も広くとても快適でした。祖母と叔母（母の妹）と静かに暮らしているところに私たち家族4人が増えたのですから、一度ににぎやかになりました。叔父（母の弟）はビルマに兵隊さんとして行っていました。

添田国民学校に転校し3年生になりました。新しい友達と庭のぐみの木の実を食べたり、柿をもいで食べたり、どんぐりの実を拾ったり新鮮でした。祖母の家は果物の木が多かったのです。学校から皆でたんぼに行き落ち穂拾いをした事もあります。田舎の学校の良さです。父が週に一度、おみやげを持って添田までやってくるのが楽しみでした。

昭和20年「8月15日」、大事な放送があるというので祖母と母と一緒に近所の家までラジオを聞きに行きました。私は何が何やらさっぱり分かりませんでした。母が「もう戦争は終わったよ、これからは防空壕に入らなくてもいいね」といったのが記憶に残っています。

この日から学校のお勉強はガラリと変わったのです。先生がいわれる教科書のページを開いては、そこに書いてある文字をまっ黒にぬりつぶしていくのです。大変な作業でした。

私たちはすずりで墨をすり、筆にたっぷり墨を含ませて次から次と字を消していきました。

教科書は落書きもしないようにして大切にみつがっていましたのでびっくりしました。

『戦争に負けたから仕方ないのだ』と子供心に思っていました。読む所が少なくなりました。

黒崎の家は20年6月、八幡大空襲であとかたもなく焼失しました。戦後まもなくして父母達と焼跡に行ってみました。井戸とレンガ塀だけが残っていました。私の心の中には2年生まで過ごした家は今もあるのです。間取りも思い出せるのです。祖母の家に引っ越していなかったら何もかも燃えていたのでしょうか。昭和12年生まれ、物心ついた頃には戦争が始まっていた。貴重な体験をしたと思っています。二人の孫のためにもこの平和がいつまでも続く事を願っています。